日本のプロコーチ宣言第1号　榎本日出夫（日立戸塚コーチ）

私のバスケット狂書

その（20）

"女の意地"の対決

「V1」目指しゾーン防御を用意

山崎戦へ選手燃える

"V1"を目指す全日本に対しての術は、途中のゲーム経過はいっさい考えず、一点でもゲームが終った時点で勝っていれば良いという考え方が第一で「何が何でも山崎に勝つんだ……いや"山崎さん"に勝つんだ……」という気持がイッパイでした。

それゆえ、途中のゲームにおいてはベンチもいっさいやらずゲームの流れにそってメンバーチェンジをする程度で、タイムアウトもいっさい取らずといった心構えで、「何も見せるな、"一対一の力"でやって来い」という、何とも大きっぱな指示でゲームが始まったものです。

しかし、選手もよくしたもので、疲れた時くらいは、「タイムアウトを取ってくれたってよいのに……」などと文句を言いながらも、随分に勝っていってくれたのです。

さて、いよいよ「山崎」との決勝になったわけですが、三日いきゲームが始まってみるとやはり「山崎」は速いパスまわしと、クイック・シュートのタイミングが日本リーグの時よりもさらに良く、やはり「ゾーン・ディフェンス」を用意してきて良かったと思いました。

今までの考え方だと外角のシュートが入るときには、ゾーンは無理だという考え方があるのですが、蓉からの合宿で、その"常識"を破る工夫をしてきたのです……。

それは、ボールマンに「行きそうで行かない」、「行かなそうで行く」と言った変幻自在のフットワークづくりに精を出して来たからなのです。これは、ボクシングの"モハメッド・アリの試合"を見ていて考えたのですが、このフットワークをディフェンス面で使えたら、どんな風になるのだろうか？……といったところから、発想が始まり、少しでもタイミングの狂いが出てきたら、シュートは入らなくなるだろうし……、次には抜くことにならず、必ずパスで逃げるだろう――と考え、次のディフェンスを「パスラインカット」に集中したわけです。

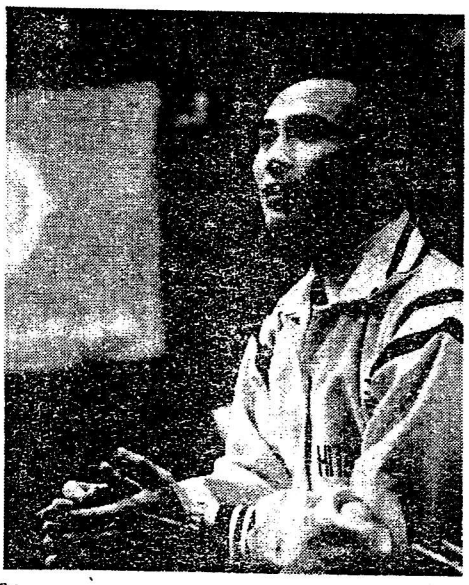
とにかくボールマンに"平和な気持"で、シュートを打たせないで、次のパスをカットでね　とにしたのです。

しかし、そんなこちらの作戦よりも、日本リーグで、負けたくやしさとしての「女の意地」が、先きに出てしまい、スサマジイ"リバウンド、ルーズボール"の争そいになってしまいました。

このために、リードマンの谷口が四反則をおかしてしまい、ゲーム展開は、かなり苦しくなってしまいましたが、相手のプレスに対してのボール運び入に"ジン"と"ミヤ"が自信を持って、やってくれたおかげで、このピンチを切り抜け、おまけに勝負どころで、「覚悟」を決めて出した谷口が、大活躍で、得点の上でも、大きく貢献してくれ、残り12分でセフティーリードを取ることに成功したわけです。あとは、「ミスなく、ゲームを終えれば良い」……わけだったのですが、この10分間の長かったこと。それは、今年の全日本の前半の10分までのガマンと同じくらい、心に残るものでした。

次回は、"四冠"を達成したこの全日本を中心に書いてみたいと思います。

〈続く〉



榎本日出夫

武蔵中学（東京）、武蔵高校（同）、武蔵大学（同）をそれぞれ卒業。現在、女子実業団チームの日立戸塚コーチ。昭和十六年七月七日生まれ

〈現住所〉横浜市戸塚区舞岡町二三二―ロ―六　電話〇四五（八二三）二七〇九番。

＝前号までのあらすじ＝

十年前のある夜、杉野短大からコーチ依頼の電話があり、深く考えずに好きなバスケットができるーと引き受けたことが私の人生を大きく変えた。その夜、先輩や局部のすすめもあり、日立戸塚を見るようになったが、この時どうせやるならーと「プロコーチ」の看板をあげ、"バスケットでメシを食う"決心を固めた。そして色々の苦労を重ね悩みながら、ようやく日本リーグ入りを果したが、この時、今までの苦労と疲労の積み重ねもあり、やめようと考えたりもした。しかし大好きな選手たちやバスケットを放り出してまでやめる勇気はなく、再度「日本一」の座を目指して、もう一度挑戦する決心を固め、その第一目標を当時日本リーグ第二位の座にいた第一勧銀においた。その第一段階として、手ごわかった"素材集め"にのり出し、ようやく集まってきたが、今度は異質の人間集団を同じ目標に向かわせるための「組織に取り組む心の確立」に努力を傾やした。この年、四十九年は日本リーグ、全日本総合とも三位となりそして五十年。日本リーグで強敵に連勝して遂に初優勝をとげ、さらにオールジャパンも制覇して念願の「日本一」の座についた。しかもこの時、恩人の山内専務部長の急死というショックがあり、それをのりこえての勝利だけに、本当に意義深いものだった。

暮からの合宿で"常識破り"を

BASKET BALL IS MY LIFE